

## 海外フィールドワークの課題と多文化共生社会 における民族コミュニティ維持の検証

奈良県立大学地域創造学部  
准教授 城戸 英樹

### 1 研究の目的と概要

本研究の目的は、地域課題に関する海外フィールドワークの実施を通じて、コモンズ制導入後の海外フィールドワークの課題がどのようなものであるのかを明らかにすることである。そのために、専門ゼミ生（3 年生）によるパイロット的な海外フィールドワークを実施し、学生アンケートと現地での実地調査によって、課題の抽出を図る。

2014 年度に開始されたコモンズ制度のもとで、フィールドワーク（8 単位）が卒業単位の中に位置づけられた。その中で、海外フィールドワークはフィールドワーク科目の一部を担うものとされている。その一方で、本学においてはこれまで海外フィールドワークの経験がほとんど蓄積されていない。そのため、本研究では実際に海外におけるフィールドワークを試行することで、本学の海外フィールドワーク実施に基礎的な資料を提供する。

本研究では、地域における多文化共生の実態把握を行うために、多文化主義国家であるカナダにフィールドワークに赴く<sup>1</sup>。この海外フィールドワークの実施を通じて、コモンズ制における教員引率型海外フィールドワークにどのような困難があるのかを把握する。具体的には、準備・企画段階、実施段階のそれぞれでどのような課題が生じるのかを実際のフィールドワーク実施によって確認する作業を行った。

本研究は以下の通り進められた。まず、実際に海外フィールドワークを計画、実施することにより、企画、調整、実施の各段階でどのような課題があるのかを把握する。さらに、学生に対して、企画、実施の各段階でヒアリング調査を行い、学生側から見た海外フィールドワークの意義と課題を把握する。

現地フィールドワークでは、カナダのバンクーバー、ビクトリア、トロントを訪問し、多文化主義社会の中で民族コミュニティがどのようにして維持されてきたのかを検証する。カナダの多文化共生社会の一つの特徴は、民族・国籍ごとに集住しながら地域社会が構成されている点にある。しかし、同じ国内にあっても今回訪問したバンクーバー、ビクトリア、トロントでは、居住者の民族構成が大きく異なる。そのため、同じ多文化社会にあっても、それぞれの都市でみられるコミュニティの特徴には違いがみられると考えられる。この点をフィールドワークから学生に体験させることが一つの狙いである。

また、今回のフィールドワークでは、海外の大学との交流も取り入れた。他国の学生や教員と交流することで、多様な視点から物事をとらえる姿勢を学ぶことができると考えた。具体的

---

<sup>1</sup> 本研究代表者が所属するコミュニティデザインコモンズにおける海外フィールドワークを想定して本テーマを設定した。

には、本学の学術交流協定、学生交換協定締結校であるビクトリア大学で学生交流と行い、トロント大学で教員との交流を行った。

## 2 フィールドワークの準備・企画

フィールドワークの実施に当たっては、訪問先の選定、関係者とのスケジュール調整、全体スケジュールの決定と航空券等の手配など、事前準備が重要である。

### ①フィールドワーク先決定

本フィールドワークを実施するのに際して、フィールドワーク先にはカナダを選択した。その要因としては、コモンズ教育に資するという意味で多文化共生社会であること、本学と学術交流協定を結んでいる大学が存在すること（ビクトリア大学）、研究代表者が現地の状況を把握していることがあげられる。まず、コモンズ教育に資するという意味で、コミュニティデザインコモンズの一つの柱である多文化共生コミュニティの把握を行う狙いがあった。カナダは、世界の中でも多文化共生社会の例として挙げられ、その点でフィールドワーク先として望ましいと考えられた。

次に、本学との学術交流協定校の存在である。ビクトリア大学とは連携協定と学生交換協定を締結しており、本学の学生の海外フィールドワーク先として重要な存在である。本研究によってフィールドワークを試行することで、今後の両大学間の関係強化に向けて良い機会となることを期待した。

最後に、研究代表者の個人的要因がある。研究代表者はこれまで研究でカナダに複数回訪問し、今回のフィールドワーク先の都市についても複数回訪問、滞在した経験を持つ。学生を海外に引率するのにあたって最も重要なことの 하나가 事故を防ぐということである。この点から、引率者が現地の状況を知っているということは欠かせない要素であると考えられる。

以上の3点を踏まえ、さらに多文化社会であるカナダの実情を知るという側面も考慮し、今回のフィールドワークでは、バンクーバー、ビクトリア、トロントを訪問先とした。バンクーバーはカナダ大西洋岸の主要都市であり、アジア系コミュニティが強いことで知られている。これに対して、ビクトリアはイギリス系文化の特徴を残す都市である。また、交流協定校であるビクトリア大学を訪問するという目的もある。最後のトロントは、カナダ最大の都市であり、西海岸とは異なる民族構成を持つ。これらの3都市を訪問することで、カナダの多文化主義の側面を体験することが主要目的である<sup>2</sup>。

### ②訪問先との調整

上記の通り訪問都市を決定したが、各都市でフィールドワークを実施するために事前調整を行った。具体的には、ビクトリア大学を訪問し学生交流を行う企画を立てたことと、トロント大学を訪問し専門家との面談を行うことである。まず、日程については、2月の中旬で調整を行った。これには、フィールドワークの準備に時間を取ることと学生の休業期間中であることを考慮した。

ビクトリア大学との間では、アジア太平洋学部（Department of Asia Pacific Studies）の Iles 准

---

<sup>2</sup> ただし、カナダ多文化主義の大きな要素であるフランス系カナダについては、主に費用面の課題から今回のフィールドワークでは訪問できなかった。

教授を通して調整を行った。主にはメールのやり取りで日程の調整を行ったうえで、2014年12月にビクトリア大学を訪問した際に最終調整を行った。それらの調整の結果、アジア太平洋学部の授業（日本の政治、経済）での奈良県立大学学生によるプレゼンと質疑応答（英語）、アジア太平洋学部提供の日本語授業（中級日本語）での交流（日本語）という内容で決定した。プレゼンについては、専門ゼミを3つのグループに分け、日本の地方自治に関するプレゼンを行った。日本語での交流については、ビクトリア大学から学生に日本語を使う機会を提供したいとの申し出を受けて実施した。

次に、トロント大学との調整では、社会学部（Department of Sociology）の Ito Peng 教授に依頼して、カナダの多文化社会についての意見交換を行うこととした。Peng 教授は、比較社会政策の専門家として著名であり、カナダ多文化社会についてヒアリングする相手としては理想的であると考えた。

これらの調整を行ったうえで、各都市において現地踏査を行う予定を組み込んだ。実際に通りを歩き、どのような人がどのような生活を送っているのかを肌で感じる事が重要と考えた。

以上を踏まえて、今回のフィールドワークの日程は以下の通りとなった。

表 城戸専門ゼミ | カナダ研修スケジュール

| 日程       | 内容              | 移動行程            |
|----------|-----------------|-----------------|
| 2月16日(月) | 移動日・バンクーバー市内研修  | 伊丹→羽田/成田→バンクーバー |
| 17日(火)   | 移動・ビクトリア市内研修    | バンクーバー→ビクトリア    |
| 18日(水)   | ビクトリア大学交流会      | ビクトリア           |
| 19日(木)   | 移動日             | ビクトリア→トロント      |
| 20日(金)   | トロント市内研修        | トロント            |
| 21日(土)   | トロント市内研修        | トロント            |
| 22日(日)   | オンタリオ州研修（ナイアガラ） | トロント            |
| 23日(月)   | 移動日             | トロント→           |
| 24日(火)   | 移動日             | →羽田→伊丹          |

### ③航空券と宿泊先

最後に、上記のスケジュール調整を並行する形で航空券と宿泊先の手配を行った。旅行会社を通して手配するという選択肢もあり得るが、参加人数が7人（教員含む）と少ないこと、また中間に旅行会社を挟むことによる手数料を考慮して、教員自身で手配を行った。その際、学生と相談して、彼らが出せる最大の予算額（今回で言えば、航空券、ホテル代、食費などの滞在費合計）で20万円以内に抑えることが最大の目標であった。

まず、航空券については、バンクーバーでの滞在を24時間以内にする事によって乗り継ぎ扱いにするなど、できるだけ費用を抑える工夫を行った。また、航空会社は北米に乗り入れている複数の航空会社を比較して最も費用が安かったエアカナダを選択した。エアカナダはカナダ国内の路線の充実度からいってもっともよい選択であった。航空券は燃油サーチャージを含めおよそ12万円かかった（一人当たり費用、以下も同様）。

次に、ホテルについても、学生と相談しながら各都市のホテルを決定した。海外のホテルの場合、多くの場合安いことは治安の悪さに直結するために、宿泊先の選定は重要である。その

結果、バンクーバーは YWCA バンクーバーホテル、ビクトリアはデザイン・ビクトリア、トロントはオムニ・キング・エドワードホテルに決定した。滞在が進むにつれてホテルのランクを上げていったが、旅の疲れを考慮するとこれはよい選択だった。学生は3人で一部屋（男女別にツインの部屋に追加ベッドを入れる）とした。ホテル代については、全行程（全7泊）で約4万円となった。

それ以外に、海外旅行保険の契約についても教員が行った。学生各自で保険契約を行うことも考えたが、クレジットカードを持っていない学生（旅行前）などがあるために、一括して保険を契約した。保険内容は、死亡保障は最低限、けがや病気の治療保障と旅行中のトラブルに対する保険（賠償責任、飛行機遅延、手荷物遅延）を重視した。保険料は約3000円（全9日間）であった。これ以外の費用としては、リムジンバス、現地での交通費が1万円程度、食事代が2万円程度（個人差あり）、その他雑費が1万円程度かかった。最終的には20万円の予算内におおむね抑えることができた。

これらの手配については、費用の余裕がある場合には旅行会社に任せることが明らかに時間的な節約となるだろう。もしくは、国際交流室の体制が充実すれば、国際交流室にゆだねることも一つの方法かもしれない。一方で、今回のように少人数かつ教員が現地の状況を知っている場合には教員による手配も一つの手段である。費用面では個別に手配を行った方が多くの場合安くできる。

また、全体を通しての調整についても、教員個人が行うことの負担はそれなりに大きい。一方で、国際交流室にゆだねるといふ選択肢は、現地状況の把握、訪問先との人的ネットワークという点から今回はそれほど現実的ではなかった。これらの点は、毎年海外フィールドワークを実施するなど経験値を蓄積することで解消すべき課題といえるだろう。

#### ④事前準備

スケジュール調整などと並行して、学生の事前準備の機会を複数回も受けた。特に、今回のフィールドワークでは英語でのプレゼンを予定していたので、そのために多くの時間を費やした。

まず、2014年7月、9月、10月末にそれぞれ全体の概要についての説明会を実施した。この中で、保護者の同意を得ることやスケジュール全体の調整などの作業を行った。また、同時にフィールドワークの目的やカナダの多文化社会についての基礎知識などについても説明した。

次の段階として、プレゼンの準備作業がある。2014年12月に初校（日本語）を提出させ、1月に英語版初校を提出させた。その後、各グループごとに複数回英語表現などに修正を加えて完成に至った。

### 3 フィールドワークの実施

以下では、フィールドワーク実施の概要を述べる。上記の表の通り、フィールドワークは2015年2月16日～24日の日程で行った。

#### ①日本国内（2月16日）

初日の集合場所は伊丹空港とした。国内線区間ではあるが、出発便の2時間前（午前11時）に集合し、その後各自で昼食をとった。国内移動については、伊丹・成田便が取れなかったた

め羽田経由になった以外はそれほど大きな問題は生じなかった。

## ②バンクーバー（2月16日）

バンクーバーでは滞在時間が限られていたこともあり、またカナダ最初の都市ということもあって、街を歩くということが大きなテーマであった。その中で、旧日本人街を訪問することをコースの中に入れていた。

バンクーバー到着後ホテルにチェックインし、早速現地踏査を行った（13時～19時）。まず、旧日本人街（参考写真）を訪問した。旧日本人街は、ガイドブックでは治安が悪い地区とされているように、夜間に訪問することは避けるべき地区である。日本人街についての説明があるなど、いくつか日本人街だった面影をうかがわせるものがある。その後はダウンタウンからハーバーフロントを回り、カナダドルへの両替などをした。また、夕食後ホテルの部屋で翌日のプレゼンの最終確認を行って初日を終えた。

バンクーバーについてはカナダ初日ということもあり、それほど激しく動き回ることはなかった。ただし、時差ボケの解消のために、日中は外に出て歩くことを念頭にプランを立てた。

## ③ビクトリア（17日～19日）

カナダ滞在二日目（17日）は、バンクーバーからビクトリアへの移動、ビクトリア大学でのプレゼン、その後の懇親会と密度の濃いものになった。

まず、バンクーバーからビクトリアまで飛行機で移動し、空港からは路線バスを使ってビクトリア市内に移動した。昼食後、ホテルにチェックインし、ビクトリア大学までタクシーで移動した。15時過ぎにビクトリア大学に到着し、Iles 准教授の案内で大学内を散策したのちに、授業でのプレゼンに臨んだ。

プレゼンでは、「日本における政治とメディアの関係」、「奈良県の市町村合併」、「奈良市における市民協働の動き」について、各グループ 25 分程度の持ち時間で報告と質疑応答（おおむね 12 分ずつ）を行った。報告については、事前準備にもかかわらず緊張からスライドを間違えるなど細かいミスはあったものの、全体としては自分たちの考えを英語で伝えることができていた。一方、質疑応答では、英語での質問内容が十分に把握できずに教員から通訳してもらった場面はあったものの、カナダ人学生の文脈から見た日本の政治・地方自治について活発な議論が行われた。これらのカナダの視点は、日本側の学生にとっては新鮮なものだったようである。その後、カナダ人学生を交えて懇親会を行い、親睦を深めた。

18日は、10時過ぎにビクトリア大学に到着し、日本語の授業での学生交流を行った。この交流では、日本側の学生一人に対してカナダ側の学生 5～6 人で一つのグループを作り、10分程度でメンバーを交代しながら全体で 1 時間ほど交流した。今の日本社会の流行やポップカルチャーなどをテーマにして活発な交流が行われていた。その後、Iles 准教授などを交えて昼食会を行い、午後はビクトリア市内に戻って街を歩いた。

ビクトリア最終日（19日）は、トロントへの移動日である。朝 6 時 30 分の便だったために、ホテルを 4 時半に出発した（タクシー利用）。

ビクトリアでは、滞在時間が限られていたために大学を訪問することが主な目的となった。ビクトリア大学との交流会は学生にとって大きな負担で準備にも時間を費やした。英語で 30 人のカナダ人学生に対してプレゼンと質疑応答を行うのはプレッシャーになっていたと思われるが、その分良い経験になったと考えている。

また、バンクーバーと比較してビクトリアの治安の良さや町の印象の違いを指摘する声も学生から出ていた。バンクーバー滞在が短かったことや訪問地域の違いがこのような印象の違いにつながった側面もあるが、街を歩いているアジア系住民の少なさや建物のつくりの違いなど、両都市の違いは印象的だったといえる。

#### ④ トロント・ナイアガラ (19日～23日)

上述したようにトロント初日は、移動日であった。国内ではあるが3時間の時差があること、また飛行時間も5時間弱あることなどから、トロント到着は14時であった。到着後は、バスと地下鉄などを乗り継いで、ホテルにチェックインした。トロントのホテルは、今回のカナダ滞在中で最も良いホテルに泊まったため、学生からは驚きの声が上がっていた。また、トロントは寒波に襲われており、到着日の気温は $-20^{\circ}\text{C}$ を下回っていた。チェックイン後は中華街に行き、夕食をとって翌日に備えた。

トロント2日目は、トロント大学訪問と街を歩くことが主な目的である。まず、10時にトロント大学社会学部の Ito Peng 教授を訪問し、カナダ社会についての面談をした。面談は、英語で学生が質問しそれに Peng 教授が答えるという形で進められた。おおむね90分程度質疑応答を行ったが、カナダの移民政策、社会構造の違いからカナダ人学生と日本人学生の違いに至るまで、幅広い内容となった。Peng 教授と昼食をとり、午後は学生街、トロント大学のキャンパスツアー、さらにリトルイタリーを歩いた。

トロント3日目は、再開発地区の訪問が主な内容である。朝、トロントの市場(セント・ローレンス・マーケット)にいき、カナダの日常生活に触れた。11時ごろホテルに一度戻り、再開発地区を訪問した。この再開発地区は、旧醸造所跡を再開発し、雑貨店や喫茶店などがはいる商業地区にしたものである。

トロント4日目は、都市部から離れてオンタリオ州の郊外を見るために、ナイアガラツアーを行った。この日はナイアガラの滝からナイアガラオンザレイクという町を回るというコースをとった。ナイアガラまではトロントから車で1時間半かかったが、冬で気温もマイナスにもかかわらず観光客が来ているという、観光地としての側面を体験した。ナイアガラオンザレイクは郊外の小さな町で、それまでの都市とは違ったカナダの側面を体験した。また、夜にはトロントのコリアンタウンに行った。

トロント最終日は、移動日で空港に移動し、日本に帰国した。

トロント滞在は今回最長の日程をとっていたため、カナダ社会の様々な側面を体験することを狙いとした。トロントは住民の半数がカナダ国外出身者とされ、多民族国家、移民国家としてのカナダを知る良いケースになる。実際、学生が道を聞かれたりするなど、様々な国籍の人が共存している。一方で、今回も訪問した中華街やリトルイタリーなど、各民族が固まって居住しているのも大きな特徴である。これは、アメリカのように各民族がまじりあっている国家とは対照的である。

トロント大学訪問では、Peng 教授からカナダの移民政策の意味などを学ぶことができた。また、多民族国家故に英語に寛容であるカナダ人と話をする機会も多かった。さらに、トロントの寒さも経験できたのは、本来の目的ではないにせよ学生には貴重な経験だったと思われる。

#### ⑤ 日本帰国

最終日(24日)の夕方に羽田空港に到着し、乗り継ぎをして伊丹空港に21時前に到着した。

伊丹空港到着がやや遅れ、奈良行きのリムジンバス最終便に間に合わないなどはあったが、概ねスケジュール通りに行程を終えることができた。

#### 4 まとめ

本教育研究では、教員引率型海外フィールドワークについて、企画から実施に至る一連の流れについて実際にフィールドワークを実施することによって確認した。本フィールドワークは、7泊9日の日程で行われた。その間のフィールドワークとしての活動時間はおよそ50時間であった。これは、本学のフィールドワーク科目の認定ルールによれば2単位分と10時間の余剰になる。これを踏まえると、およそ1週間のフィールドワークが2単位に相当すると考えられる。

本フィールドワークの結果、いくつかの課題が確認された。まず、費用負担の問題である。本フィールドワークでは費用負担をできるだけ抑える工夫を行ったが、学生からは費用負担が重いという声が出た。本学では、海外フィールドワークに参加する学生に向けた支援体制がほとんど存在しない。この点については、文部科学省等が提供している留学支援プログラムへの申請など、学生の海外渡航を支援するプログラムの整備が望まれる。

次に、学生の主体性があげられる。本フィールドワークでは、学生と適宜相談、議論し、内容を決定していった。そのため、渡航先やスケジュールなどについて、学生の意見を一定程度反映できた。しかし、最終的にフィールド先での行動決定する過程では、現地を知り、訪問先との関係を持つ教員側の意見が採用された。現地の危険などに関する情報を教員が把握しているということからやむを得ない部分もあるが、いかに学生主体でフィールドワークを構築するのかということが課題といえる。これについては、準備により長くの時間をとるなど、学生が主体的に企画に関与できる体制をとる必要を感じた。他方で、完全に学生主体の計画の場合、現地での安全性を確保するための方策をとる必要がある。特に、教員がフィールドワークに同行しない場合には、どのようにして安全確保をするのかが大きな課題となるだろう。

最後に、人的ネットワークの構築についてである。本フィールドワークでは、教員個人の研究的背景や人的ネットワークによって、フィールドワークの構築を行った部分がある。この点について、本学が持つ海外とのネットワークを維持強化する必要性は高い。本学はカナダ・ビクトリア大学との学術交流協定、学生交換協定など、海外の大学との関係を強化してきた。このような関係は、一度交流を行っただけではいずれ希薄化することが想定されるために、定期的に訪問や学生の派遣を継続する必要がある。そのためにも、本研究で明らかになった課題を踏まえ、海外フィールドワークが実効的に展開されていくことが望まれる。今後本学の国際交流や海外フィールドワークが一層発展していくことを期待したい。



【参考写真】

1 バンクーバー

①本フィールドワーク参加者（バンクーバー・ハーバーフロント）



②バンクーバー日本人街





## 2 ビクトリア

### ③ビクトリア大学プレゼン



### ④ビクトリア大学語学交換



3 トロント

⑤トロント大学専門家面談



⑥トロント大学

